

## 第1部 半島古代史の中の百済

### ——百済の成立と三国時代——

「百済と百済王」と題して6回に亘りお話をさせていただきます。お断りしておきますが、この講座は学術的なものではありません。枚方中宮にある国指定特別史跡「百済寺跡」について認識を深めて頂くために、その背景となる朝鮮半島にあった百済という国や、その百済が滅亡して日本にやってきていた王子善光が百済王（クダラノコニキシ）の姓を天皇から与えられ、そしてその一族が大きな足跡を残したという歴史を、いろいろな角度からお話ししてみたいということでもあります。

学問的にはいろいろな意見があって確定的なことを申し上げにくいこともありますが、いろいろな文献や資料の中から自分なりにまとめたことをお話しすることになりますので、私の理解不十分のためいろいろな疑問やご意見があるかも知れません。お気付きの点はどうぞ遠慮なくお聞かせ頂き、私も共に勉強させて頂きたいと考えております。

なお、この講座の中で引用します日本書紀、続日本紀の記述は講談社学術文庫の全現代語訳によるものでありますのでご了承ください。またこの中に掲載しております写真や図版などは、私が撮ったり作成したもの以外に、いろいろな文献から転載させて頂いておりますので、その出所はその都度申し上げたいと思っています。また主な参考文献については最後のページにまとめて掲示しております。

さて、今日の本題に入る前に2点ほどお話ししておきます。

一つは「百済とはそもそも何なのか」ということ、もう一つは「百済という名は枚方の百済王神社や百済寺以外にどこかにあるのか。」ということです。この2点を通して一応「百済とは何か」というおぼろげな概念を先ず持つて頂きたいと思います。

## 1. 百済とは

### （1）クダラとペクチェ

朝鮮半島の4世紀前半から7世紀の終わりに掛けて三国時代と言われる時代がありました。高句麗、百済、新羅の3つの国が鼎立して勢力を争った時代です。それ以前には半島北半分が高句麗と中国唐の属領地である楽浪郡・帶方郡などがあり、南半分に馬韓、弁韓、辰韓という韓族を主体とする3つの部族連合体がありました。現代の国家のような中央集権的な国家とは違って、豪族とか族長たちによる地域連合体です。半島の南西部が馬韓で後に百済になる地域、真ん中あたりが弁韓または弁辰と言われて後に伽耶とか加羅と言われるようになる地域、そして東の部分が後に新羅となる辰韓です。この三韓を総括する辰国があり馬韓の月支国が支配していたとも言われます。

この馬韓の中に「伯済（ハクサイ）」というのがありました。この伯済が周辺の部族国家を吸収してだんだん大きくなり、やがて名前を「百済」に改めました。中国の隋書には「はじめ百家を率つて海を渡って来たので、それに因んで「百済」と号した。」とあります。これはそのまま「ヒャクサイ」と呼んでいたと思われそうですが、ハングルでは「ペクチェ」と呼びます。数字の百はペク、済はチェです。済州島はチェジュドと言います。半島で百済をクダラと称したことはありません。因みに高句麗はコグリョ、新羅はシラまたはシルラです。

では何故クダラと言うのかというと、ハングルではクは大きいという意味、またダラはナラの前にクが付くことによって発音上ダラになったと考えられますが、ナラは国という意味です。奈良の都の奈良はもともと国という意味だったと思われます。そこでクダラとは「大きい国」と言うこと

になります。多分、むかし倭人から「百済とはどんな国か」と問われたのに対して百済の人が「大きな国だ、クダラだ」と言ったのがクダラの名前の起こりだと考えられます。百済の2番目の首都は熊津（ウンジン）ですが、コムナリとも称しています。このコムナリが訛ってクダラになったという説もあります。更に百済からの渡来人たちが百済をクンナラ（本国）と呼び、それがクダラになったのではないかとの説もあります。いずれにしてもクダラは我が国での特別な言い方なのです。

## （2）日本にある百済

では百済という字が付いている事物や場所は日本中にどれくらいあるのでしょうか。百済と関係がある地域ということになるとかなりな数になるだろうと思いますが、ずばり「百済」となりますとそれ程多くはありません。どんなものがあるか見ておきましょう。

### ① 湖東三山の百済寺（ヒャクサイジ）

百済という私たち枚方人間は百済王神社や百済寺跡を思い浮かべますが、先ず百済寺というのは他に二つ存在します。一つが滋賀県東近江市にある釈迦山百済寺です。金剛輪寺、西明寺と共に湖東三山と言われて紅葉の名所として観光地になっています。ここではクダラでなくヒャクサイと呼んでいます。

百済寺の縁起書によりますと、聖徳太子がその師と仰いだ百済僧の慧慈が十一面観世音菩薩を祀ったのが始まりということで、この地に百済からの渡来者が大勢いたところから百済寺と名付けられたと言われます。太子がこの地に来られたとき衣裳や風俗の異なる人々に接して、「あなた達はどこから来たのか」と尋ねられると、彼らは「百済から」と答えました。そこで太子は「あなた達は異国で母国を偲んでいるだろう。あなた達の国の名を付けた寺を建てよう」と言って百済寺を建てられたそうです。

百済がクダラと呼ばれるようになったのはいつ頃からかよく分かりませんが、縁起書に書かれている推古14年（606年）創建というのが事実とすれば、その頃はヒャクサイと呼ばれていて、現在もそのままヒャクサイジと呼ばれるのでしょうか。その時から60年足らずで百済は滅亡し、多くの百済人が近江に亡命してきていますから、その人たちが「故国は大きな国だ、クダラだ。」と言ったということになるのでしょうか。それが日本書紀なんか採用されてクダラという言い方が定着したのではないかと推測できそうです。



### ② 奈良県広陵町の百済寺

奈良県北葛城郡広陵町に百済（クダラ）という地名がありますが、その近くの二条という所に真言宗のお寺である百済寺があります。中世に建てられた三重の塔（重要文化財）があり、小さな本堂があります。ここが舒明天皇によって建てられた百済寺の跡であると言われてきました。しかしこの周辺からは官寺らしき寺跡が全く発見されていません。一方最近の櫻井市吉備にある吉備池廃寺の発掘調査から、実はこの方が百済大寺跡であるというのが有力になりました。

舒明大王の11年に「大宮と大寺を造らせる」と詔して、百済宮を築き九重の塔を造ったことが記録されています。この九重の塔は百済川のほとりに造ったとありますから、百済川が今の葛城川としますと、そのほとりにある百済寺跡は位置的には合致しています。また、舒明の後で次の大王となった皇極は、その元年6月に百済大寺の南の広場で雨乞いの法要を行った、そしてまた9月には宮殿と百済大寺を造りたいと言われたと日本書紀は伝えています。皇極は飛鳥から離れた百済宮

が気に入らず飛鳥に戻りたい、百済大寺も移したいと願ったとも考えられます。そして舒明が最初におられた飛鳥岡本に板蓋宮を造り、桜井に百済大寺を造られたということになるのでしょうか。そうするとどちらが百済寺跡として本当かというのではなくて、舒明の百済寺の跡が広陵町にあり、皇極の百済大寺の跡が桜井市にあると考えることも出来るのではないのでしょうか。但し舒明の百済寺は完成されることなく、九重の塔とその他少しの建物があった程度の小規模なものだったためにその痕跡が残らなかったのでしょうか。また立派な建物が造られたとしても桜井へ運ばれて再利用されたとも考えられます。

この百済寺の本堂は地元では「大織冠」という名で呼ばれているようです。大織冠というのは大化改新によって制定された最高の位階のことで、藤原鎌足だけにしか与えられていないということで大織冠といえば鎌足の代名詞にもなっています。ところが百済から人質としてわが国に来ていた王子豊璋が、百済が滅亡したときその復興のために王として担がれて半島に帰りますが、その時に大織冠の官位を与えられています。豊璋がわが国に来たのが舒明3年であり、百済宮が建てられたのは舒明11年で、百済宮は豊璋との関係が深かったのではないかと……。大織冠という呼び名が伝わっているということは、このことを裏付けているように思われるのです。

ところで日本書紀によりますと、舒明3年に人質としてやってきたのは豊璋だけで禅広（善光）の名はありません。そこで善光は百済滅亡のときに日本にやってきた亡命者だとの説があります。しかし有力な亡命者の名前は日本書紀に書かれており、王子がいれば当然その名が入っている筈です。そうでない限りそのときの亡命者とは考えにくいと思います。豊璋と共にやって来ていたと考える方が妥当のようです。



### ③ 大阪市にある百済駅

大阪市東住吉区今林にＪＲ貨物駅である百済駅があります。梅田貨物駅の機能を吹田貨物ターミナル駅とこの百済駅に分散移転させるために改修工事が進められました。この近くに百済という地名があって、むかし摂津国百済郡があったところと考えられています。桃谷駅の近くには細工谷遺跡があり難波宮の条里の跡と見られていますが、ここから「百済尼寺」と書かれた土器が出土して百済との関連が考えられます。



半島で百済が完全に滅亡したのは663年ですが、その翌年に「百済王余善光らを難波に住まわしめた」ということが日本書紀に書かれています。ここが今に百済の名を伝える天王寺区や住吉区の一帯であったことは先ず間違いないところでしょう。何故難波に住まわせたか、細工谷遺跡は難波宮の名残と考えられていますので、その辺り一帯はかなり開かれた土地だったでしょう。百済王（クダラノコニキシ）という名前は持統天皇が姓として善光に与えられ、これ以後百済王の活躍が始まります。この地には氏寺としての百済寺も建設された筈で、桃谷駅近くの堂ヶ芝廃寺（天王



寺区堂ヶ芝1丁目観音寺境内)がそれに比定されています。

善光の曾孫である敬福の時に百済王一族はこの地から河内国交野に本拠地を移しました。そのためここは急速に寂れてしまったということですが、洪水によってこの地が荒廃したため聖武天皇が宮内卿の敬福を河内守に任じ交野の地を与えられたのではないかと考えられます。続日本紀によりますと敬福は750年(天平勝宝2年)5月14日に宮内卿に任じられていますが、その10日後の5月24日の記述に「京中にわか雨が降り、川の水が溢れ出た。また河内の伎人(くれ)堤・茨田(まんだ)堤などが所々決潰した。」とあります。堤の決壊によって大和川や淀川が氾濫し、百済郡も大きな災害を受けたことが想像されますので、この時に代替地として交野郡が与えられ、ここが河内であるところから河内守に任ぜられたと考えることができるわけです。

余談ですが大阪市に久太郎町というところがあります。船場のど真ん中ですが、キュウタロウと読むのですが昔はクダラと読んだのではないかと思います。古地図によればこの辺りは島で、だから島之内という地名があり、その島の中に明らかに百済という地名がしるされています。



#### ④ 法隆寺の百済観音

奈良県斑鳩町の法隆寺が所蔵する飛鳥時代の木造観音菩薩像が百済観音と呼ばれていて、国宝に指定されています。通常の仏像に比べてたいへんスリムで、高さが210.9センチメートルという背の高い観音像です。

明治時代まではこの像を「虚空蔵菩薩」と呼んでいたようですが、明治19年に法隆寺の宝物調査が行われたときには「朝鮮風観音」とあり、この像が観音さまであるという説があったことが分かります。明治38年に法隆寺は調査のときの名称である観音に異議を唱え、虚空蔵菩薩とするよう願いを出しますが却下されました。明治44年になって寺内の土蔵からこの像の宝冠が発見され、その宝冠に阿弥陀如来の化仏が刻まれていたところから、この像が観音菩薩であることが確定しました。

なぜ「百済観音」なのかということはいまだ定かでないようですが、大正6年に法隆寺が出した「法隆寺大鏡」の解説がその初出だということです。和辻哲郎の「古寺巡礼」はたいへん有名ですが、その本の中ではこの像を百済観音と呼んでいます。百済観音の名前が定着したのはこの古寺巡礼が大きな影響を与えているようです。その様式はインド・ガンダーラに通じる半島渡来のものであり、百済観音と名付けるに相応しいものであったということでしょう。

#### ⑤ 宮崎県美郷町の「百済の里」

美郷町には次のような百済伝説が伝わっています。

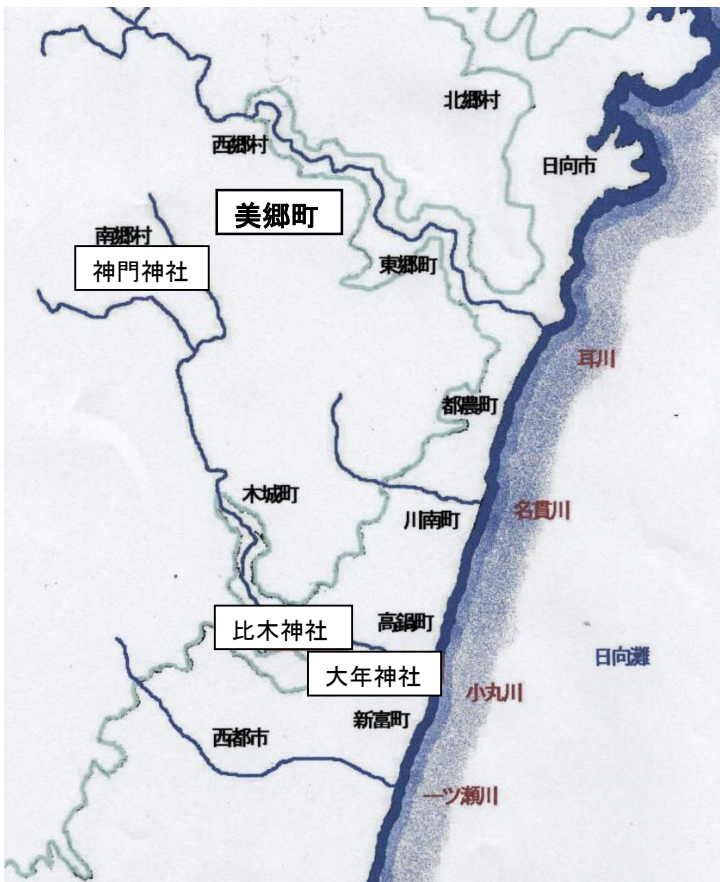
7世紀に朝鮮半島の百済で大乱が起こり、禰嘉王とその子の福智王が乱を避けて従者と共に親交のあった大和王朝を頼って奈良地方に逃れてきました。その後の動乱から再び逃亡の道を辿り、九州地方を目指した一行は瀬戸内海で時化に遭い、日向の国の2つの浜(日向市金ヶ浜、高鍋町蚊口浦)に漂着後、父王らは美郷町南郷区の神門(みかど)に、王子らは木城町の比木(ひき)にとそれぞれ移り住みました。しかし間もなく追っ手がやってきて禰嘉王は東郷区の伊佐賀で防戦しますが、矢を受けて死んでしまいます。

このような伝説を背景に日韓交流のシンボルとして造られたのが「百済の里」です。そこには百済の最後の都だった扶余にある国立博物館の客舎をモデルにして造られた「百済の館」があります。瓦や敷石は韓国から取り寄せられ、梁や軒の丹青は韓国の職人によって仕上げられたそうです。館内には百済の国宝・重文のレプリカなどが展示されており、また日本全国の百済文化の足跡も紹介

されています。

ところでこの伝説が伝えるように南郷区の神門神社には禰嘉王が祀られ、木城町の比木神社には福智王が祀られています。更に高鍋町鳴野にある大年神社は、禰嘉王の妻で福智王の母である之伎野（しぎの）を祀っています。そしてこれらの神社の間で次のような2つの祭が連綿として続けられているのです。

【師走まつり】 旧暦の12月23日、比木神社の宮司らのご神体を奉じて南郷区の神門神社へと向かいます。先ず日向市の金ヶ浜に行つて禊ぎをして身を清め、そこから耳川を遡つて東郷区に入ります。伊佐賀で出迎えに来ている神門神社のご神体と合流し、戦いの故事に基づいて野焼きをし、南郷区に入ると小丸川の石を拾つて石塚に奉納し、神門神社に到着します。神門の人々は円錐形の櫓28基に火をつけ「迎え火」を焚いて出迎えます。翌24日は、神社の裏山を「おーおー」と叫びながら歩いて、死者のための御哭（みね）を捧げます。夜になると神楽が奉納され、25日には



別れの宴が開かれます。そして最後には、別れの悲しみを隠すために顔に鍋底の墨を互いに塗りあう「へぐろ塗り」を行つてから、比木神社へと帰っていきます。

【大年下り】 毎年11月4日（昔は旧暦11月初申の日）に比木神社のご神体が村人に奉じられて母の之伎野（しぎの）を祀つた高鍋町の大年神社へと向かいます。到着すると海岸で石を拾い石塚に投げ込みます。祭礼は御旅所で行われて神社内には入りません。その後各所を巡行し夕方に比木に帰るのです。

さて、この伝説をどう理解したらよいのでしょうか。7世紀半ばの663年に百済は滅亡し、多くの亡命者がわが国に渡来してきます。禰嘉王や福智王はその時渡来した王族なののでしょうか。記録にはその名が全く見当たらないので定かではありません。しかし伝説の中には、御哭やへぐろ塗り、石塚の行事など半島の風俗が散りばめられています。従つて王族の関係者がこの

地に來たことは十分考えられることです。

では、奈良へ行つた王族がなぜまた九州を目指して行かなければならなかつたのでしょうか。恐らく亡命者の間で反目があつて逃げ出さなければならなかつたのでしょうか。百済の最後の王である義慈王は王族の翹岐（ギョウキ）や高官など40人余りを追放しましたが、彼らはわが国に渡つてきて近つ飛鳥辺りに住んだようです。その中に禰嘉王や福智王がいたのでしょうか。義慈王の子である豊璋や善光とは相容れなかつたでしょう。義慈王の重臣から禰嘉王らを密かに葬るよう連絡があつたかも知れません。禰嘉王はそれを察知して九州へ逃げますが追つてがやってきます。

また、百済滅亡後に渡つてきた亡命者の中に禰嘉王らがいたかも知れません。善光の兄の豊璋は百済滅亡の前に王族の鬼室福信と対立して福信を殺害します。その対立の燦りが亡命者たちの間にあり、何らかの武力抗争があつたとしても不思議ではありません。だから追つ手がやつてきたのだと考えることができます。なお、禰嘉王らがこの地で手厚く祀られたということは、百済系の人たちがここに古くから定着していたことを表しているかも知れません。



## 2. 古朝鮮の成り立ち

さてこれから半島のお話しに入ります。半島ではどのようにして国家が形成されていったか。百済という国が出来る前はどのような状況であったかということから見ていきたいと思います。

朝鮮半島においても旧石器時代、新石器時代、青銅器時代を経て農耕が盛んになってきますと、原始共同体関係が崩壊していき、生産物と生産道具を独占的に所有する支配者が登場してきます。そして土地の囲い込みが始まり城邑国家が形成されるようになります。この城邑国家として半島に登場してくるのが古朝鮮と呼ばれている国です。神話的な要素が強いのですが、その中に現実的な姿が見られるのも事実でしょう。

### (1) 檀君神話

高麗時代に作られた「三国遺事」では、朝鮮全体の始祖神・開国神として檀君王儉を取り上げています。それによりますと帝釈桓因の子の桓雄が熊女と結ばれて生まれたのが王儉で、中国の堯帝（中国の最初の王朝である夏以前の王）即位50年に平壤を都として建国したのが檀君朝鮮であると伝えます。のちに阿斯達（アサダル）に遷都し1500年間朝鮮を治めましたが、箕子が朝鮮に封ぜられたので檀君王儉は隠棲して阿斯達の山の神になったということです。



檀君神話はもともと民間信仰だったものが、1429年に利氏朝鮮の4代目の王世宗が、檀君を高句麗の始祖である東明王（朱蒙）廟に合祀したところから、以後国家的な祭神となりました。19世紀末には民族意識が高揚して民族の祖神としての信仰が高まり、再びもてはやされるようになりました。韓国では檀君の建国をBC2333年とし、1961年までは檀君紀元を採用し西暦年に2333年を加えて年号を数えていたのです。日本では戦前に西暦年に660年を加えて皇国暦を作っていましたが、これも民族意識の高揚をねらったものだったでしょう。朝鮮民主主義人民共和国では1994年に檀君の遺骨が発掘されたとされ、それを祀る檀君陵を平壤に作りました。神話を現

実のものとして権威付けをする、国家主義的権力のすることはどこも同じようです。

## (2) 箕子朝鮮

前述のように箕子朝鮮は、檀君朝鮮に中国から箕子が冊封されてきて出来たことになっています。しかし史記や漢書の記述はこれと異なっていて、中国の殷代末期に紂王の師を務めていた箕子が、殷の滅亡に際し東行して現在の朝鮮の西北部に亡命し、ここに国を建てて王となり「八条の教訓」というのを示して理想的な政治を行ったということになっています。しかし箕子の東行は後世に作られたお話しと考えることができますし、檀君と同じように箕子もまた神話の域を出ないとされますが、歴史的にみて朝鮮西北部に韓族による社会が形成されており、そこにある種の政治的権力が誕生していたことは間違いないと考えられています。

檀君による建国が理想とされているように、箕子によって国家の理想像が描かれたということは、民族の一体感を高めるためのものだったと言えるのかも知れません。

### (3) 衛氏朝鮮

衛氏朝鮮は半島の歴史上初めての实在王朝とされます。朝鮮半島の西北部は箕子朝鮮に見られるように中国との交流が行われ、その深い影響を受けていました。中国の鉄器文化も導入されていま

す。BC 195年燕王の廬綰（ロワン）が漢に背いたとき、その武将の衛満は部下千人を引き連れて北朝鮮に行き、箕子朝鮮の最後の王箕準に信頼されて封地を貰い、やがて勢力を蓄えて国王箕準を脅かし、漢の恵帝の頃に箕準を追放して自ら王となり王儉城（平壤城）を都としました。

衛満の勢力は一時遼東にまで及ぶほどでした。漢の武帝は使者を遣わして招撫しましたが、衛満の孫の右渠が使者を殺して抵抗したので、BC 109年武帝は大軍を発して王儉城を攻め、右渠は内乱によって殺され、衛氏朝鮮はBC 108年に3代80年をもって滅亡しました。

衛氏朝鮮の前半部分には不明確なところが多いのですが、後半部分は先ず史実と見て間違いのないようです。衛氏朝鮮の性格として、漢民族の衛満などが移住して土着の人々を支配したという定説に対し、衛満自身が朝鮮系の人であり、衛氏朝鮮は韓人による部族国家であったという見方が有力になっています。そして中国に対する反骨的な精神は次の高句麗に引き継がれていきます。

### 3. 三国の成立と発展

#### (1) 高句麗の成立

百濟の成立は高句麗が前提になっていると考えられるでしょう。

漢の武帝は滅ぼした衛氏朝鮮の地に、真番郡、臨屯郡、玄菟郡、楽浪郡の4郡を設置して朝鮮半島を支配しようとした。しかし原住民の抵抗が強くてBC 82年には真番、臨屯の2郡を廃止し、またBC 82年以降は玄菟郡の根拠地を西北方に移さざるを得なくなります。そして楽浪郡だけが半島に残ることになりました。

#### ① 朱蒙の高句麗建国

中国では武帝の死後、前漢の勢力が衰え始めました。楽浪郡などによる朝鮮半島の支配も弱くなり、朝鮮半島の北方にはツングース族の扶余、高句麗、濊、沃沮などが、南方には韓族の馬韓、辰韓、弁韓などの部族連合体が興ります。



高句麗古墳壁画

この中で特に大きな成長を遂げたのが高句麗でした。その始祖を朱蒙と言います。朱蒙について高句麗の神話の中に次のような話があります。

「川の神である河伯の娘の柳花は、天帝の子の解慕漱（ヘモス）と出会って結ばれるが、親の許しなく結婚したために東扶余に流される。東扶余王の金蛙（クマ）の所へ辿り着いた柳花は、身ごもって大きな卵を産んだ。やがて一人の子が卵の殻を破って出てきた。顔立ち、体格が優れ、智慧があり、7歳にして弓を作り、矢を射れば百発百中で外すことがなかった。よく矢を射る者を朱蒙と言ったので、それを名前にした。金蛙の息子たちは朱蒙に嫉妬して殺そうとしたが、朱蒙は柳花の助けでいち早く逃げ出し、卒本に着いてそこで高句麗を建てた。」

ここに登場する卒本は現在の中国遼寧省の桓仁市と推定されており、三国史記によれば建国はBC 37年のこととされています。

#### ② 成長と服属

BC 75年に首都が国内城から西北方の永陵に移された玄菟郡（第2玄菟郡）の一つの県として高句麗県が登場します。高句麗県は高句麗人の居住地で鴨緑江の中流域に当たるところです。玄菟郡では最も文化的・社会的に発展していた地域で、ここに朱蒙（東明王）がBC 37年に高句麗を



建てたのですが、これは北方の扶余の勢力が高句麗に進出してきたこと、扶余族が南下してきたを意味するでしょう。

高句麗は49年には長駆中国の山西省太原にまで侵入し、118年以降にはワイ貊、馬韓などの周囲の諸族を糾合して、玄菟・遼東両郡や扶余と戦い、東方諸族の盟主的な存在となりました。また132年には遼東郡から楽浪郡に通じる要衝の西安平県を攻撃し、赴任途上の帯方郡令を殺害し、楽浪太守の妻子を捕らえました。このように1～2世紀にかけての高句麗は、強大な後漢の玄菟郡・遼東郡をしばしば攻撃しましたが、190年頃遼東太守であった公孫度が、後漢の混乱に乗じて自立し高句麗を服属させてしまいました。

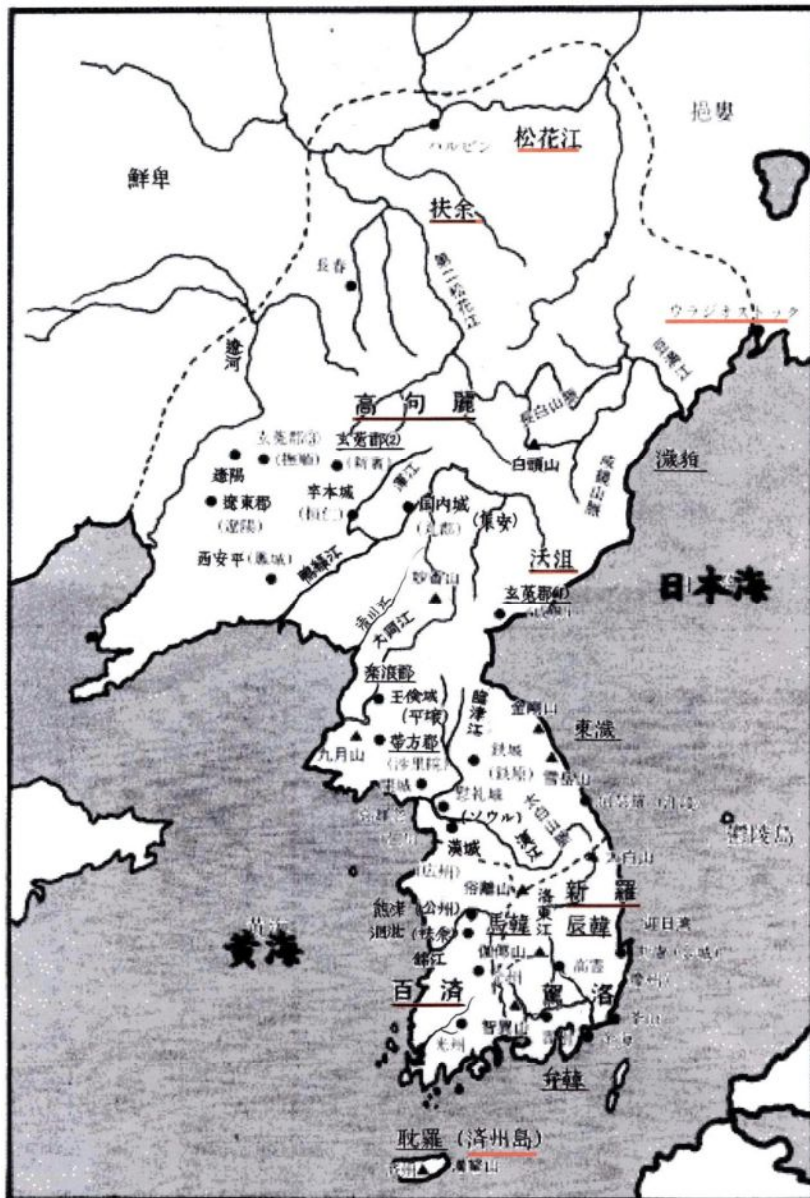
### ③ 発展期そして三国時代へ

高句麗の首都が卒本から集安の国内城に移った年次は定かではありませんが、三国志では204年としています。紀元後3年という説もありますが204年が妥当でしょう。高句麗を構成していた旧小国の王子たちが、山上王を擁立して王位に付けました。王の兄の発岐が旧小国の一部と結んで公孫氏に降ったので、山上王は王都を国内城に移したのです。この頃公孫氏は強大になり楽浪郡を支配し、更に朝鮮南部に勢力を伸ばすために帯方郡を設置しました。しかし、220年に後漢が

滅び、中国は魏・呉・蜀の三国時代を迎えます。高句麗は公孫氏にならって魏と呉に両属していましたが、魏はこれを嫌い、238年に楽浪・帯方の2郡を復興し公孫氏を滅ぼします。244年、中国魏の武将母丘儉（カンキュウケン）が高句麗遠征に着手し、東川王を破って首都丸都城を攻略しました。更に245年にも高句麗を攻めて肅慎まで追い込みます。東川王には貴族の援護がなくわずかな従者と共に落ち延びます。これによって高句麗の勢力は著しく減退し、東方（東夷）諸族が高句麗の支配下から中国の支配下に入りました。

しかし中国の晋が衰えると、美川王はしばしば遼東郡に出兵し、311年には西安平県を陥れて遼東郡と楽浪・帯方両郡の通路を断ち切ったので、313年には晋は楽浪郡を放棄せざるを得ませんでした。翌314年高句麗は馬韓・辰韓と共に帯方郡を滅ぼし、平壤方面に勢力を伸ばしました。

中国が五胡十六国の戦乱時代に入ってから高句麗への亡命



者が相次ぎ、それらから新しい文化をもたらされた高句麗は、国政を整え軍備を拡張して積極的な



339, 342年と再度に渡って中国の前燕が高句麗を侵略し、故国原王は単身東方に逃れました。その後高句麗は前燕に臣従して、355年には故国原王は高句麗王に冊封されています。この冊封は前燕が華北に進出するためのものでしたが、中国王朝が外臣に内臣と同様の称号を与えた最初のものであり、朝鮮半島の王が中国王朝より冊封を受ける始まりでもありました。

## (2) 百済の成立

① 三韓（馬韓・弁韓・辰韓）

古朝鮮の衛氏朝鮮がBC108年に後漢の武帝によって滅ぼされ、漢の郡県組織による支配の中に編入されてしまいます。楽浪・臨屯・真番・玄菟の4郡が置かれ、楽浪を中心として統治が行われ、漢の官僚や商人が進出して経済的な利益を得ました。楽浪郡はその後漢と朝鮮半島間の貿易の中継基地としての役割を担い続けました。しかし南部においてはその統制も十分に行き渡らず、臨屯・真番の2郡は間もなく廃止され、玄菟郡は北西部へと大きく後退します。

百濟の拡張 (1~4世紀)

百濟の拡張 (1~4世紀)

- 百濟の領域
- 現在干拓された地域
- 百濟の攻撃路
- 馬韓征服路
- 百濟の交易路
- 高句麗の攻撃路
- 激戦地
- 馬韓族侵入を撃退した地点
- 馬韓征服のための前線基地
- 位置が不明な地名
- 当時の主な地名
- 現在の主な地名

韓国歴史地図(平凡社)より

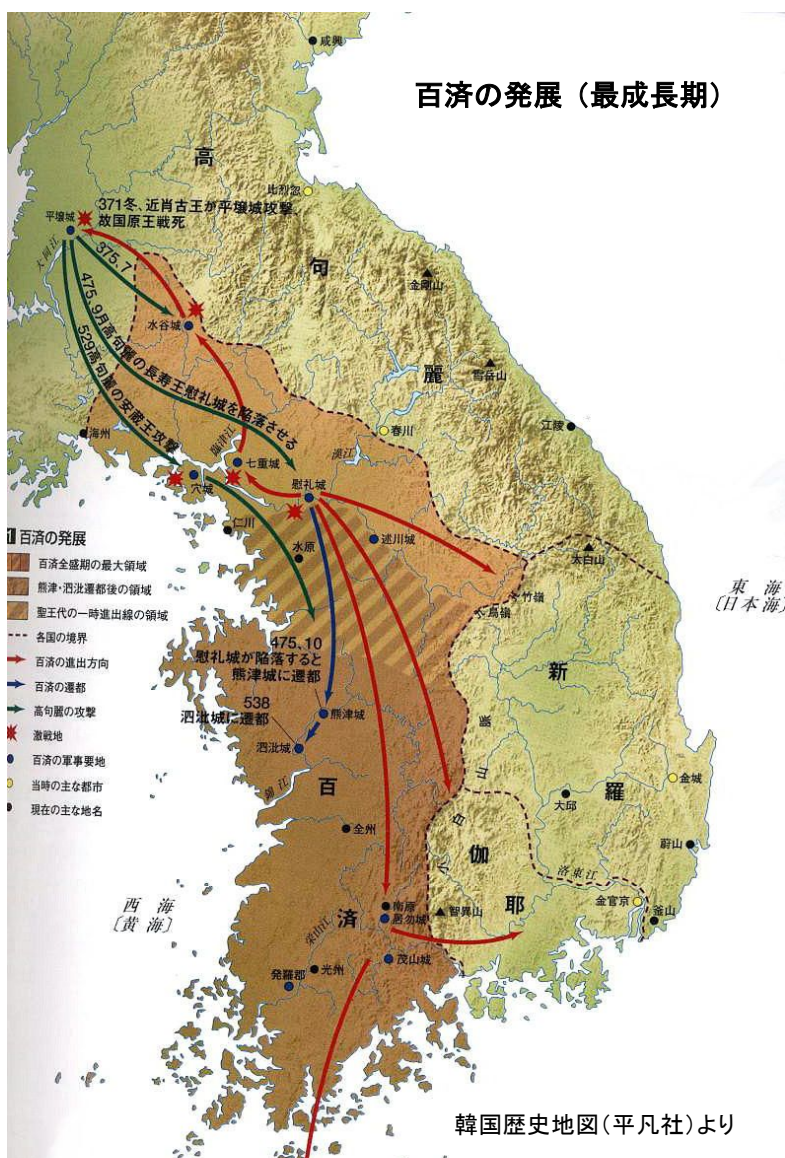
1-9

## ② 温祚王の建国

三韓の中でも馬韓は50余国を擁して最大でした。現在の漢江から西南の全体をカバーする広い地域を馬韓が占めていました。漢江の南岸に伯濟国があり、それが勢力を拡大して百済国となりました。

百済の始祖は温祚王と言われます。百済の建国神話によりますと、温祚王は高句麗の始祖朱蒙の第3王子でしたが、異母兄の類利（後の高句麗第2代王の琉璃明王）を恐れ兄の沸流と共に逃れて南下し漢山に至りました。沸流は弥讎忽（ミチュフル）今の仁川に居所を定め、温祚は漢江そばの慰礼（ウィレ）今のソウルを都とし国号を十濟としました。これがBC18年のことです。その後沸流が亡くなると温祚がその民を合わせて国号を百済とし、自ら扶余氏を名乗ったと言われます。これは扶余族が次々に南下して最初は弥讎忽周辺に定住したのが、次第にその中心を慰礼の方に移していったことを表しているのではないかと考えられます。慰礼の方には伯濟国があり、そこに扶余族が進出して勢力を拡大し、支配権を確立して百済国になったということではないでしょうか。

百済は建国すると周辺の国々を合わせながら馬韓全域に勢力を拡大していきました。漢江流域は土地が広大で肥沃であり食料が豊富で、水上交通の便がよく山間部からは鉄が産出して、軍事力の強化と経済的発展のためには極めて恵まれた場所であったため、百済国は大いに国力を養いました。



3世紀の8代古爾王（234～286）の時代には、6佐平と16等級の官職体系が整備され、律令が施行されるなど国家制度が整えられました。また古爾王代の246年には帶方郡との間に大きな衝突があり帶方太守が戦死、これを契機として中国の郡県よりも百済が優勢になり国家として大きな成長を遂げました。250年頃には馬韓の中心である目支（モクチ）を征服して南方に勢力を広げ、東北方面の東濊、北の楽浪や高句麗、東南の新羅とも争いながら、3世紀頃には強大な国に成長しました。

この時期の中国では後漢が220年に滅んで、魏・呉・蜀の三国が活躍する三国志の時代に入っており、内部抗争を繰り返す中で対外的に勢力を伸ばせる状況ではありませんでした。従って楽浪・帶方の力も衰弱していたのです。百済が発展するのにこの中国状況は大いに都合がよかったと言えるでしょう。

## ③ 近肖古王の活躍

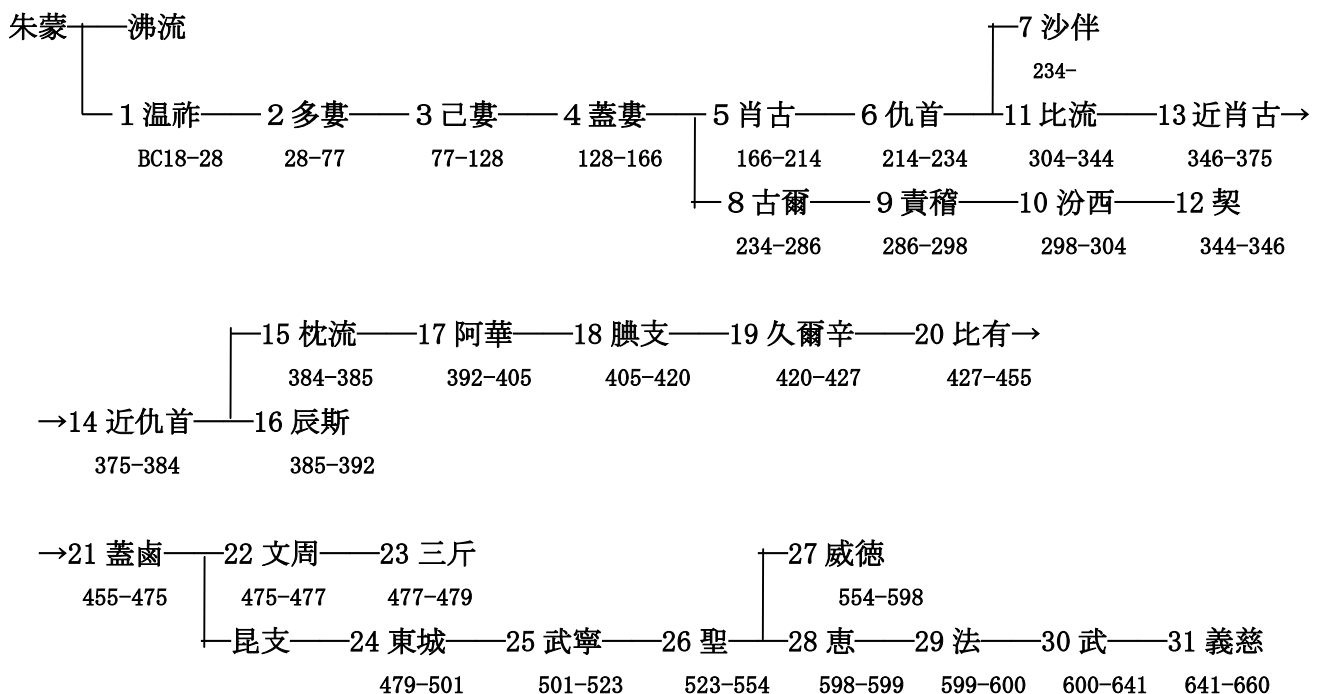
百済は4世紀に入ると更に強力な国家に成長します。近肖古王が大規模な征服事業を敢行して王権を強化しました。王は先ず洛東江流域の伽耶地域を征服したのち、榮山江や蟾津江流域の馬韓諸国を次々に征服して領土を南海岸地域にまで拡大しました。そしてまた北



方に目を向けて、かつて帯方郡であった地に進んで高句麗軍を撃破し、捕虜 5 千人を生け捕りにします。更に 371 年には近肖古王は自ら部隊を率いて平壤に乗り込み、高句麗の故国原王を殺害しました。このようにして近肖古王が獲得した地域は広大で百済史上最大となりました。

更に百済は、楽浪郡が設置されてから中国人が開いてきた海路を通じて貿易を盛んに行い、わが国とも密接な関係を持つようになりました。369 年には高句麗広開土王の攻撃を受けて漢江以北の地を失いますが、こうした高句麗との対立関係の中であって百済は倭との親交を進めるべく、倭王雄略に七支刀を送っています。また応神天皇の要請に応じて王仁を倭国に送り、王仁は論語と千字文を伝えました。更に中国の南朝とも交流を密にし、東アジア世界に積極的に関わりを持ちました。このような対外的な発展と同時に、国内では官等制を拡充して王位も兄弟相続から父子相続に変え、王妃もまた真氏に固定して王族の安定化を図りました。仏教を受け入れ、一連の改革を完成させ、百済の国力は著しく強化されたのでした。

### (参考) 百済王朝系図



### (3) 新羅の成立

新羅は日本ではシラギと呼んでいますが、韓国ではシラまたはシルラです。日本の呼び方は新羅の後に城を付けて新羅城 (シラギ) としたものと考えられます。三国の一つ新羅はどのようにして興り発展したのでしょうか。

#### ① 辰韓の斯盧

新羅は朝鮮半島の東南部の慶州平野を中心としたところに発展した辰韓 12 国の一つ斯盧から始まりました。慶州平野は兄山江に沿い山に囲まれた幅 1 km 長さ 10 km という狭い土地ですが、土地が肥えていて農耕に適しており、そこに 6 つの村落があつて連合して斯盧を形成していました。斯盧は社会的にはかなりの発展をしながらも、地域としては半島東南部の偏ったところにあるため、4 世紀半ばまでは対外的な活動は殆ど見られませんでした。



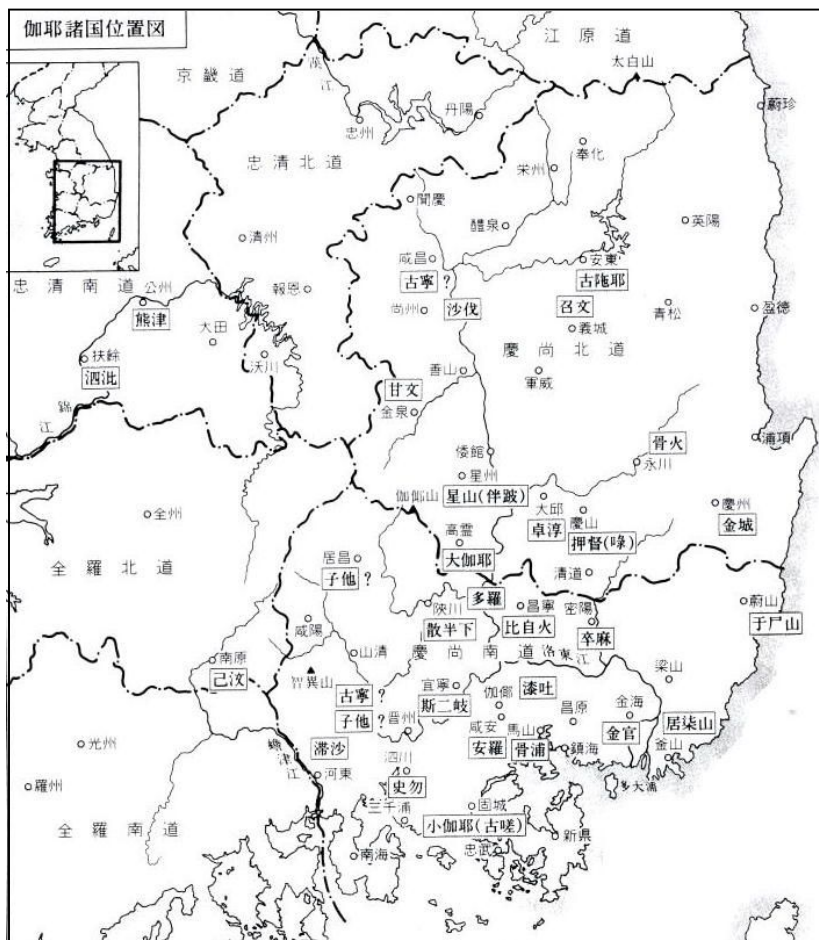
斯廬の建国神話として朴赫居世の物語があります。

「斯廬6村の人々が闊川（アツセン）の岸边に集まって会議をしていると、楊山の麓の林の中に光と共に白馬と大きな卵が舞い降り、卵の中から神童が生まれた。その子は赫居世（光輝く子）と名付けられて斯廬の始祖王となった。」

この神話によると、斯廬において既に6村共同体の合議制が確立していて、そこに赫居世が指導者として立てられたものと考えられます。地域的に隔絶していた村落共同体の中に、古朝鮮が滅亡した頃から北方より移住民が流れ込み、中国の先進的文化をもたらししました。赫居世はそのような移住民の中の有力者であり、鉄器により農耕の高度化を行うなどの施策によって支配者にのし上がったのではないかと考えられます。斯廬の支配者は居西干（コソガン）・次次雄（チャチャウン）と呼ばれました。居西干は首長を意味し、次次雄はシャーマンです。このことは首長がシャーマンの性格を帯びていたことを意味しています。この地域の村落共同体ではまだ政治的・軍事的なリーダーを必要とせず、交易を通じた資源の再分配と祭祀儀礼を通じた共同体の結束が重要だったことを表しています。

## ② 斯廬から新羅へ

赫居世の朴氏が支配者となった斯廬に、東海岸付近から来た脱解（タレ）勢力（昔氏）が支配者層に加わります。そして王位は朴氏、昔氏と土着の金氏の3氏が交替で担うようになります。この間に斯廬は次第に勢力を強めて周辺にある小国を征服しながら発展します。更に東海岸の蔚山を征服し、これによって海路が開かれて中国や倭国との交流が進展していきます。また洛東江の流域にも進出して領土の拡大を図ります。



域にも進出して領土の拡大を図ります。

その過程で6村の連合体制が6部の統合による貴族体制に変わり、17代の奈勿王（356～402）の時代からは王位を金氏が独占するようになります。この名勿王の時代に新羅という国名に変えられたのではないかと考えられており、国際的に新羅の名が見られるようになります。新羅が377年と382年に辰韓諸国を代表して中国の前秦に朝貢したことが知られます。この頃（399年）に倭が新羅に侵入し戦ったことが、高句麗の広開土王碑文に書かれています。

## （4）伽耶の成立

高句麗・百濟・新羅のほかには弁韓といわれた地域に伽耶がありました。弁韓12国というのが伽

耶諸国であると言ってもほぼ間違いありません。但し弁韓は弁辰とも言われる通り辰韓との境はあいまいですからはっきりとは言えません。日本史上に表現されている「任那」もこの地域を指しているようです。

## ① 伽耶の建国

伽耶は洛東江西岸の6つの小国から始まったとも言われています。伽耶の建国説話には次のような話があります。「伽耶9村の頭目が集団を率いて亀旨峰に上がり歌を歌って遊んでいた。そのとき天から黄金の卵が降り、その卵から6人の男の子が生まれた。その子たちがそれぞれに国王になった。」というのです。6つの国から成った連合体ですから六伽耶と言いますが、実は伽耶には五伽耶、加羅七国、浦上八国などいろいろな連合体の呼び名がありますので、六伽耶が伽耶全体を指しているわけでもなさそうです。

六伽耶の中で最も発展したのが金海の金官加羅でした。これを狗邪韓とも大伽耶とも言いますが、洛東江上流にある高霊伽耶も大伽耶と呼ばれていてよく混同されます。また倭ではここを任那と呼んでいました。任那は伽耶全体を指していることもあるようですが、この金官伽耶またはその西の方にあった安羅を指していることもあるようです。金海は洛東江下流の沖積平野に位置し農耕が発達しました。また洛東江流域では鉄が豊富で鉄器が大量に生産されました。伽耶はこの鉄器を中国や倭に輸出し、両国との貿易によって大きな富を得ていました。しかし小国に別れていた伽耶は連合体を成していたものの、強力な統一国家を形成することが出来ませんでした。地理的な条件(山、川、溪谷で分断されていた)が大きかったのですが、各地域がそれぞれ交易によって経済力を付けていたため独自の発展を遂げ、かえって統一が進みませんでした。

## ② 周辺諸国の狭間で

統一国家として成長した新羅は洛東江を挟んで伽耶諸国と領土問題で対立し、しばしば交戦が行われました。小国でまとまりのない伽耶は常に敗北して新羅の洛東江東岸への進出をゆるすと、新羅への対抗上百済との関係を緊密にしました。

4世紀から5世紀にかけて新羅が強大化すると伽耶は大きな打撃を受けますが、高句麗が平壤に遷都した427年からは百済も新羅も高句麗の南下に対応しなければならなくなり、その間に伽耶は勢力を回復します。そして高霊伽耶即ち大伽耶を中心として統合を図ります。大伽耶は伽耶諸国をバックにして高句麗・百済・新羅の三国と競争する力を持ち、中国の南朝に使節を送るまでに成長していきました。

また、三国との関係の中で倭国とも親しい関係を持ちました。倭から見ても半島の中で最も近い地域であり、伽耶との親しい関係の中で、そこに権益を確保したのが「任那」だったでしょう。余談ながら、高霊伽耶はわが国の源流である「高天原」ではないかと推測できます。高霊をタカミタマ→タカマと読めます。高天原から降臨した天孫ニニギは高霊伽耶からやって来たのではないかと推測できるのです。しかしその高霊伽耶は、強大になった新羅により562年に滅ぼされてしまいました。こうして半島は真の意味での三国時代に入っていきます。



## 4. 三国時代（高句麗・百済・新羅）

### （1）三国時代の成立

朝鮮半島の歴史の中で三国時代と言うのは、古代国家である高句麗・百済・新羅という3国が鼎立して覇権を争った時代です。

## ① 三国時代はいつか

その三国時代はいつ始まっていつ終わったか、考え方の違いで諸説あるのですが、一般的には3

13年に高句麗が中国の支配する楽浪・帯方の2郡を滅ぼした時に始まり、新羅が高句麗を滅ぼしたのち中国唐の勢力を半島から追い出し、半島全体を支配する統一新羅を打ち立てた673年までと考えられています。これは半島から中国の勢力を追い出して、即ち中国の支配から脱して、と言ってもその影響は濃厚なのですが、3国が抗争しながら統一化へ向かった時代として位置付けられているのです。

しかし313年にはまだ百済や新羅は国家体制が完成されておらず、3国のほかに伽耶という地域がありましたから、字義的には完全な三国時代と言えません。百済が近肖古王によって国家を確立したのは346年ですし、同じく新羅が奈勿王によって国家建設が行われたのは356年のことです。3国が揃い踏みしたのは356年ということになります。それでも伽耶には諸国があり、そこが新羅に併合されたのは562年のことです。三国時代の始まりは356年からとも、ずっと下った562年からとも言えるのです。

また百済が滅びたのが660年ですから、この時点で3国ではなく2国になってしまいましたので、三国時代はここで終わったという考え方もあります。そうしますと三国時代というのは562年から660年までのたった100年間ということになるわけです。

## ② 三国抗争の始まり

高句麗はBC37年頃に朱蒙が建てたと言われますが、古代国家として確立したのは204年に山上王が都を集安に移した頃でしょう。この頃には高句麗は、西は中国の遼東地域から北は扶余の



故地まで、そして南は大同江の南岸までと広大な領土を擁していました。その高句麗が313年に楽浪・帯方を滅ぼしたことによって、中国支配から脱し韓族による独自の国家形成が急速に進みました。また、百済や新羅が相次いで周辺諸国を併合しながら古代国家を作り上げました。

百済は近肖古王時代に南の馬韓や伽耶諸国を併合して領土を急速に拡大します。371年には高句麗の平壤を攻め故国原王を殺害して大勝し、都を漢城に移して貴族連合のもとに百済の政治体制を確立しました。近肖古王は372年に中国東晋に朝貢して「鎮東將軍・領楽浪太守」に任ぜられています。楽浪郡や高句麗から中国の文化を積極的に取り入れて国政や文化の充実を図り、またわが国との交渉もこの頃に始まって、369年には友好の印として倭王に有名な七支刀を送っています。枚方によく知られている王仁博士は馬韓だった地域の人ですが、応神天皇が皇太子免道稚郎子の教育のために要請したのに応えて、近肖古王が派遣した人物として伝えられています。

新羅もまた356年に斯盧から国名を新羅に変えて国家体制を確立しましたが、さらに周辺諸国を統合し、中国前秦に朝貢して東アジアの国際社会に

登場します。倭軍が新羅を攻めたのもこの頃です。集安にある高句麗の広開土王碑の碑文によると、391年に倭軍が加羅・新羅を破り、北は楽浪までも進出しましたが広開土王がこれを攻撃しました。そして396年、広開土王は百済を撃ち破り漢江の南岸まで後退させます。399年に



なりますと、百済と倭とが連合して新羅を攻め、高句麗が新羅を救援しています。404年には倭軍は高句麗を攻めて帯方郡方面に侵入しましたが、407年には高句麗が百済・倭を打ち破っています。このように4世紀の後半から5世紀の初めにかけて3国の抗争が激化し始めました。

わが国や韓国の歴史家の中には、この広開土王碑に書かれた内容は改竄されたものであるとか、もっと後の事実をこの時代に当て嵌めたものだとして否定する説があります。皇国史観の反動として古代の歴史を全面的に創作だとする考え方から来ているようです。しかし最近では碑文の精密な研究や文献の整備によって、碑文の内容には誇張があるものの史実に近いことが明らかになってきています。

## (2) 三国の抗争

朝鮮半島を支配するためには漢江と洛東江を結ぶラインを重要視する必要がありました。漢江は小白山から発して北西に流れ、仁川あたりで黄海に注ぎます。洛東江は同じく小白山から発して南東に流れ、釜山のあたりで朝鮮海峡に注ぎます。むかしはここが島の南北東西を結ぶ交通の一大動脈でした。半島の河川は日本の河川と異なり流れがゆるやかで、船で遡るのも比較的容易いのです。百済の漢城から漢江を遡って小白山に至り、少し歩いて洛東江の上流に出てそれを下っていくと高霊伽耶を通り、金官伽耶に至ります。従ってこのルートを制することは半島の南半分を制することに繋がります。

### ① 漢城から熊津へ

南に進出したい高句麗、北へ出て中国との関係を強化したい新羅、そして南を固めて高句麗に対抗したい百済の3つの国が、この漢江・洛東江の流域諸国を武力で征服したり、自治を認めながら協力関係を結んだりして、それぞれの国の連合体に組み入れていきました。

475年には高句麗が百済の漢城を攻め蓋鹵王を殺害します。この時代の国王は一枚岩の強固さを持っていたのではなく、自国に組み入れた被征服国の王や貴族の連合体による統治でしたから、一旦緩急の折には洞ヶ峠を決め込んだ諸貴族・豪族に裏切られることがありました。蓋鹵王もそのような貴族たちの反逆によって殺害されたのでした。このことを事前に察した蓋鹵王が、子の文周王を予め熊津へ逃れさせていたと考えられます。ここで新しく貴族を統合して熊津百済が生まれました。高句麗から離れた場所に新しい連合体を作り上げたのです。従って漢城百済と熊津百済は統治体制の異なる別の国、即ち百済は一旦滅びて新しく復興したと考えてもよいでしょう。

高句麗では4世紀までに多くの山城が築かれていましたが、この三国抗争の時代に入って半島南部の各地で山城が築かれました。自然の地形を利用した山城は侵略軍から村民を守るためのもので、半島全体では約2000カ所の遺跡が存在しています。この時代のものだけではありませんが、抗争の大きさを物語っていると言えるでしょう。日本にも同じような石積みの城跡が見られますが、百済滅亡時に唐の襲来に備えるため天智天皇が各地に山城を築きました。渡来した百済人によるものと考えられます。

熊津城址



## ② 倭国との関係

熊津に移った百済は、漢江流域を喪失したことによって国力が大きく減退します。東城王はその補いを付けるために同じく高句麗から圧迫を受けていた新羅と同盟を結びます。そしてかつて馬韓の地であった半島西南部の農地開拓を進めることによって、北部で失った国家の財政の基盤を補いました。その勢力は耽羅と言われた済州島にまで及びました。西南部地域は倭国からの移住者が多くいたところであり任那の権益の及んだところですが、512年、513年に百済の武寧王は倭国に対してこの地の割譲を要求しています。日本書紀では割譲ということになっていますが、百済もこの地に勢力を伸ばしていて、農地開拓のための権益を主張したものと考えられます。蟾津江沿岸に当たるこの地域は水利上も重要な場所であり、また倭国や新羅に対する戦略的な面においても極めて重要な場所でした。

高句麗に対しては新羅と同盟を結んだ百済でしたが、伽耶諸国の支配権をめぐる新羅と対立するようになって倭国との同盟を強化しました。513年に武寧王は五経博士を倭国に送って文化交流を深めています。新羅は百済への対抗上敵対していた高句麗と結んで連合軍を作り、百済を圧迫するようになりました。百済の勢力の強かった伽耶地域を盛んに脅かし、532年には金官伽耶を併合します。このような新羅の攻勢に対して百済は倭国との連携強化を一層進めるために、538年には聖王がわが国に仏教を伝えています。百済から伝えられる大陸の文化は、東アジアの主要国を目指す倭国としては貴重なものでした。こうして3国はその時の事情に応じて離合集散を重ねますが、生き残りと発展のために各国は面子を捨てあらゆる手段を駆使したのでした。

## ③ 抗争の激化

百済の聖王は、倭国に仏教を伝えた538年に都を泗沘に移しました。泗沘は現在の扶余ですが、熊津から錦江の下流にあり水上海上交通の便の良いところです。中国や倭国への出口として優れていて、高句麗や新羅に対する戦略上の意味も大きかったと思われます。

聖王は551年に新羅と連合して高句麗を攻め、漢江流域の以前百済の勢力下にあった地域を挽回しました。この戦いは漢江流域を奪回したいという百済の思惑と、この方面に進出したい新羅の思惑が一致した結果ですが、新羅はその思惑を貫いて、553年には百済を急襲して漢江流域を占領します。これに激怒した聖王は自ら軍を率いて出陣し管山城（現在の沃州）で新羅軍と戦いました。しかし百済軍は大敗を喫して聖王は戦死し3万の兵が殲滅させられました。聖王の子の威徳王は倭軍に助けられて命からがら逃げ延びました。

勢いに乗った新羅は556年には半島の東海岸に沿って北上してその地域を勢力下に収め、562年には洛東江を越えて西岸の高霊伽耶（大伽耶）を滅亡させます。高霊伽耶は伽耶諸国連合の盟主でしたから、これによって伽耶の殆どが新羅の支配下に入りました。

中国では589年に隋が統一を果たしました。そして遼東まで領域を広げていた高句麗を攻めますが、高句麗はこれを退けます。百済では600年に武王が即位しますが、高句麗の南進策への対抗上随に対して新羅と共に介入を求めます。しかし百済と新羅は伽耶をめぐる争いが絶えず、各地で戦乱が起こります。一方隋は高句麗への重なる遠征によって国力を失い、618年に唐が建国することになります。新羅は唐に対して使節を送り、唐への通行を高句麗が妨げていると訴えますが、唐は三国状勢を考慮して629年には三国に使節を送り三国の和解を勧告します。百済の武王は一時期泗沘の南にある益山に別都を築きました。新羅との対抗上伽耶地域を支配するためには、南の馬韓方面に広く開かれている益山の方が戦略的に好立地であると考えたのではないのでしょうか。しかし何らかの理由恐らく高官の反対で短期間に終わり歴史的な意義を持つことなく終焉してしまいました。王宮里遺跡が残され弥勒寺の九層石塔が復元されています。

唐の勸告によって一時的に平穏であった半島でしたが、高句麗では淵蓋蘇文が立ってからは唐に対して強気に転じたので、唐は645年に10万の大軍をもって高句麗を攻撃します。しかし高句麗の巧みな戦略によって敗走のやむなきに至ります。

高句麗が唐との戦いに明け暮れているスキを見て、百済の義慈王は新羅の西部、即ち元の伽耶に攻め入りこれを奪還します。これに対して新羅は高句麗と結んで百済を挟撃しようとするのですが、高句麗は漢江流域の変換を迫って逆に新羅への攻勢を強化します。そこで新羅は唐に対して軍事援助を要請しました。一国の力では高句麗を征服できないと悟った唐は、新羅と連合して高句麗を攻めるのが得策と考え新羅の要請に応えました。そして先ず百済に対して伽耶を新羅に返還するよう要求し、百済がこれを拒否すると新羅と連合して百済攻撃を開始しました。



高句麗が対唐防衛のため築いた長城の遺跡

#### ④ 百済の滅亡

660年、唐の高宗は蘇定方の大総管として大軍を派遣し、新羅軍と合同して百済を強襲しました。海上から錦江口へ入り泗沘や熊津へと迫った唐の勢力に対して、防備体制が十分に整っていなかった百済は、たった10日間の戦いで大敗を喫して降伏し、義慈王や王子隆などは捕らえられて唐の都長安に送られ、こうして百済は滅亡しました。百済を攻めることが本意ではなかった唐は、百済からの捕虜を手厚く遇しましたが、義慈王は翌661年に病気のため亡くなってしまいます。唐は百済の地を割いて、熊津・馬韓・東明・金漣・徳安の5都督府を置き、百済の元豪族の中から選んでこれを治めさせ、郎将劉仁願にこれを統括させました。

百済の復興運動が王の一族（義慈王の父武王の甥）である鬼室福信らによって起こされました。福信はかつて百済軍を統率していましたが、仏僧道琛と共に周留城を拠点とし、倭に人質として来ていた王子豊璋を担いで反乱を起こしました。百済西部の民衆もみなこれに呼応して立ち上がります。倭は陸海の援軍を送って復興運動を支援します。斉明天皇や中大兄皇子が自ら軍を率いて九州に出陣しますが、斉明天皇は筑紫で崩御してしまいます。百済では鬼室福信と道琛の間に戦略上の対立が生まれ、福信が道琛を急襲してこれを殺害するという事件が起こります。福信の暴走を止めるために今度は豊璋が福信を殺害してしまいました。主要な指導者を失った百済の士気は著しく低下しました。662年7月に唐の郎将劉仁願が熊津で百済軍を撃ち破り、高宗に対して援軍の派遣を要請します。そして663年になって、要請に応じて出陣した唐の海軍が、白村江（錦江河口）の戦いにおいて倭・百済連合艦隊の軍船400艘を壊滅させます。豊璋はここで行方知れずとなり、この敗戦を切っ掛けにして百済の諸城はすべて唐軍に降りました。こうして百済は壊滅し大勢の百済人がわが国に亡命してきました。

唐の高宗は前皇太子隆を熊津都督として帰還させ、新羅との関係を修復させて生き残った百済人と呼び戻させます。こうした結果しばらくの間、唐の支配下において百済王朝の統治が形式上継続されました。「百済が調をささげる」という記事が日本書紀天智7年（668）、10年（671）に見られ、また都督を総括していた劉仁願は天智10年に李守真を遣わし上表文を奉ったことが書かれています。消滅した百済からの朝貢ということの背景にはこのような事情があるわけです。

#### （3）三国時代の終結

百済の消滅によって三国時代は終わったのですが、唐を加えての高句麗・新羅の抗争は更に熾烈



さを増していきました。

### ① 高句麗の滅亡

百済の滅亡後、新羅は半島南部では安泰となり北方に対して自由に動けるようになりました。唐は新羅の支援を受けて、かねてからの宿敵である高句麗を再三にわたって攻撃します。高句麗は隋・唐と続く長い戦争の時代の中で国力を消耗し尽くします。それでも淵蓋蘇文の生存中はその強い指導力によって団結力を発揮していましたが、蘇文が死亡するとその子たちの間に内紛が起きました。この機に乗じて唐と新羅の連合軍が大攻勢を掛けます。そして高句麗は百済が消滅して5年後の668年に滅亡してしまいました。

唐は平壤に安東都護府を設けて高句麗の地を唐の領域としました。こうして313年に高句麗が楽浪・帶方の2郡を滅ぼして以来、再び半島に中国の統治が及んだことになります。高句麗の各地では、劍牟岑・安勝・高延武などが復興運動を展開し、続いて起こる新羅と唐の戦争に大きな影響をもたらします。

### ② 統一の完成

三国のうち新羅が勝ち残って半島を統一し、数世紀に及んだ戦乱の時代に終止符を打ちました。しかしその統一は唐との連合によって成し遂げられたものであって、言うならば侵略者と結託して同族の国家である百済と高句麗を滅亡させ、しかも高句麗のあった半島北部の大きな地域を侵略者に与えるという悲劇的な面を持つものでした。しかし高句麗の滅亡によって新羅と唐の当初からの思惑の違いが表面化するのとは必然でした。高句麗と百済の領土帰属を巡って対立が表面化します。

668年高句麗を占領した唐は、新羅の領土であった地域に進出しました。新羅はこの唐に対して669年に戦争を起こしました。そして670年に起こった高句麗の復興運動を支援します。高句麗の最後の王宝蔵王の子安勝が新羅と結び、高句麗の復興軍である高延武の部隊が新羅軍と協力して鴨緑江を越えて進軍し、唐に対して大戦果を収めました。また劍牟岑は高句麗遺民の大規模な抗戦部隊を組織し、唐の役人を処断して新羅を訪れました。そして安勝を君主として推戴し高句麗の再建を宣言するに至ります。

新羅は唐に対する高句麗軍の力を評価して高句麗の再建を積極的に支援し、安勝を正式に高句麗王として認めました。唐は新羅の内紛を画策したり大軍を派遣したりしますが、新羅は親唐派の貴族を肅正し旧高句麗や百済の遺民集団に自治権を与えて懐柔し、高句麗軍を新羅の軍隊組織に編入して唐との長期戦に備えます。675年、唐は20万の大軍を進めますが、新羅はこれを買肖城（ソウル北方の楊州）で迎え撃って大勝します。更に676年には錦江河口で唐の海軍を殲滅させました。こうして唐を撃退し続け、新羅は大同江以南の土地を領土として確保することとなりました。これに対して唐は安東都護府を遼東へと後退させ、朝鮮半島から全面的撤退せざるをえませんでした。こうして唐と新羅の戦争は終結して新羅による半島統一が完成し、ここに三国時代が終結することとなったのです。



慶州仏国寺の多宝塔

### ③ 新羅の花郎徒

新羅はこのようにして半島の覇権者となったのですが、この新羅の強さの特色はどこにあったのでしょうか。

第17代の奈勿王（356～402）時代には洛東江流域まで領土を拡大し、中央集権的な国家

体制を整え、新羅という国号を定め国際社会に進出した新羅は、国内的にも多くの改革を行いました。農業振興のために水利事業に力を注ぎ、律令制を実施し、仏教を公認しています。真興王（540～576）の時代には有名な花郎制度が設けられました。学識があつて容姿端麗な上級貴族の青年を花郎として推戴し、その下に花郎徒として多くの青年男子を配して精神的・肉体的な修業に励ませ、戦時には戦士として活躍させました。一人の花郎には数百人から千人に及ぶ花郎徒がいたと伝えられます。この花郎徒の活躍によって新羅は百済や高句麗との戦いに勝ち抜くことができたのでした。花郎出身の金春秋は654年に武烈王として即位し、660年に百済を滅ぼし、668年には高句麗を滅亡させ、半島から唐を追い出すという功績を残します。金両基氏は「物語韓国史」の中で、660年の百済との戦いにおいて活躍した少年武士2人の死に様を紹介し、「盤屈や官昌のような貴族の少年を新羅では花郎と呼んでいた。金春秋も花郎の出身で、かれらが統一新羅を樹立する文武の礎になった。百済も高句麗も、この花郎の精神に負けたのであった。」と書かれています。百済も高句麗も新羅の花郎に負けたのだと喝破されているのです。

#### ④ 渤海の建国

676年以後、高句麗旧領の大同江以南は新羅領になり、遼東地域は唐に帰属しました。それ以外の中国東北地方の中東部や朝鮮半島の東北部には、どの国の勢力も確立していない地域が残りました。この地域の靺鞨族が唐に対して武力蜂起すると、遼西地域に強制移住させられていた高句麗人の集団が連合して唐軍との戦いに参加し、これを撃破します。そして吉林省の敦化県に都を定めて698年に渤海国を建てます。

渤海は926年に滅亡するまでの230年間、新羅と共に南北朝時代を形成しました。国号は初め震国と称しましたが、713年に唐から渤海郡王に冊封されると渤海と改めました。渤海の領土は中国東北地方の東部を中心に広がっていき、統一新羅の8倍にも及ぶ広い領土を獲得しました。渤海の活躍した時期は、唐・渤海・新羅・日本の4国が互いに使者を送って交流し、比較的安定した国際関係が保たれていたと言えるでしょう。



### （4）後三国時代

#### ① 新羅の転落

唐を駆逐して大同江以南を掌握し大きな発展を遂げた新羅でしたが、広大な領土を抱えることになって体制的な矛盾が表面化していきます。唐との戦争において新羅が勝利したのは、花郎の活躍が大きかったのですが、各地の貴族や豪族そして百済や高句麗の復興軍の力を無視することができません。新羅は半島を統一したもののこれらの勢力の扱いに悩む結果を残しました。王の支配を地方まで及ぼすために官僚による律令制度を確立しようとしします。神文王（681～692）は官僚の養成機関を設け、全国を9州に分割し5京を置いて官僚統治を図ります。地方の貴族豪族の力を削ぐために彼らを王都に移住させたり、私有地の制限を行いました。

この律令制度は8世紀に最もよく整備されますが、9世紀に入ると従来の私有制を中心とする貴族の連合体制を求める貴族たちと律令制を推進する勢力との間に争いが起こります。王都に移住した貴族たちの文化的な生活によって金城（慶州）はアジアでも有数の華やかな都市となりますが、それを重税によって支えた農村の不満は高まりました。また身分制度により高い位につくことができない地方貴族や豪族の間にも不満が蓄積されていきました。それぞれの貴族に担がれた王族の間

で王位争いが頻発するようになり王権が弱体化していきます。そして憲徳王（809～826）の時には、律令制から貴族連合体制へと逆戻りしてしまいます。そして新羅は慶州一帯のみを治める一小国に転落し、各地の貴族や豪族を統治する力を失ったのでした。

## ② 後百済と後高句麗（高麗）

そうした状況の中で9世紀末には各地で反乱が起こり、地方豪族であった甄萱（キョンフォン）や弓裔（クンイェ）が台頭して、900年には甄萱が後百済を、901年には弓裔が後高句麗を建てます。そして周辺の豪族を引き入れるために熾烈な競争を繰り広げました。

甄萱は武珍州（現在の公州）で農民反乱軍を引き込んで一大勢力を築き上げ、完山州（現在の全州）に都を定めて後百済を名乗りました。そして百済を再興するという名分を掲げて、かつての百済の地に勢力を拡大しました。

一方弓裔は松嶽（現在の開城）に都を定めて国名を後高句麗としました。後高句麗は、北は渤海国と接し南は後百済や新羅と接する広い地域を支配するようになったものの、弓裔が暴君となって民意を失うと、918年には家臣らが弓裔を追放して王建を王に推戴しました。王建は国号を高麗と改め、首都の松嶽を開京と改めました。

920年に甄萱が新羅西部の陝川（ハプチョン）などを攻撃すると、新羅が高麗に援軍を求めたため後百済と高麗の間に不和が生じます。927年に高麗の王建は、新羅を攻めた甄萱の軍と戦い惨敗を喫しました。後百済はその余勢を駆って高麗に攻め込み一時は支配領域を大きく広がりますが、930年に古昌（現在の安東）の戦いで大敗を喫して形成が逆転します。更に後百済は930年、934年と続いた後高句麗との戦いで惨敗し、935年には甄萱の子の間に王位継承争いが生じて国力が著しく減退し、936年に高麗によって滅ぼされることになります。

## ③ 高麗の半島再統一

新羅の敬順王はこれより先935年に自ら王建に降伏していました。王建は敬順王を優遇し妃を新羅王室から迎えるなど新羅人を手厚く扱いました。それによって高麗は新羅の地を平和的に手に入れることができました。後百済を滅ぼしたことによって高麗は、朝鮮半島の再統一を実現することになったのでした。

高麗は以後、1392年に李成桂の朝鮮（李氏朝鮮）に取って代わられるまで約500年に亘って半島を支配し、その優れた文化を今に伝えることになりました。高麗青磁はその代表的なものとして高麗の名を残しています。



高麗青磁